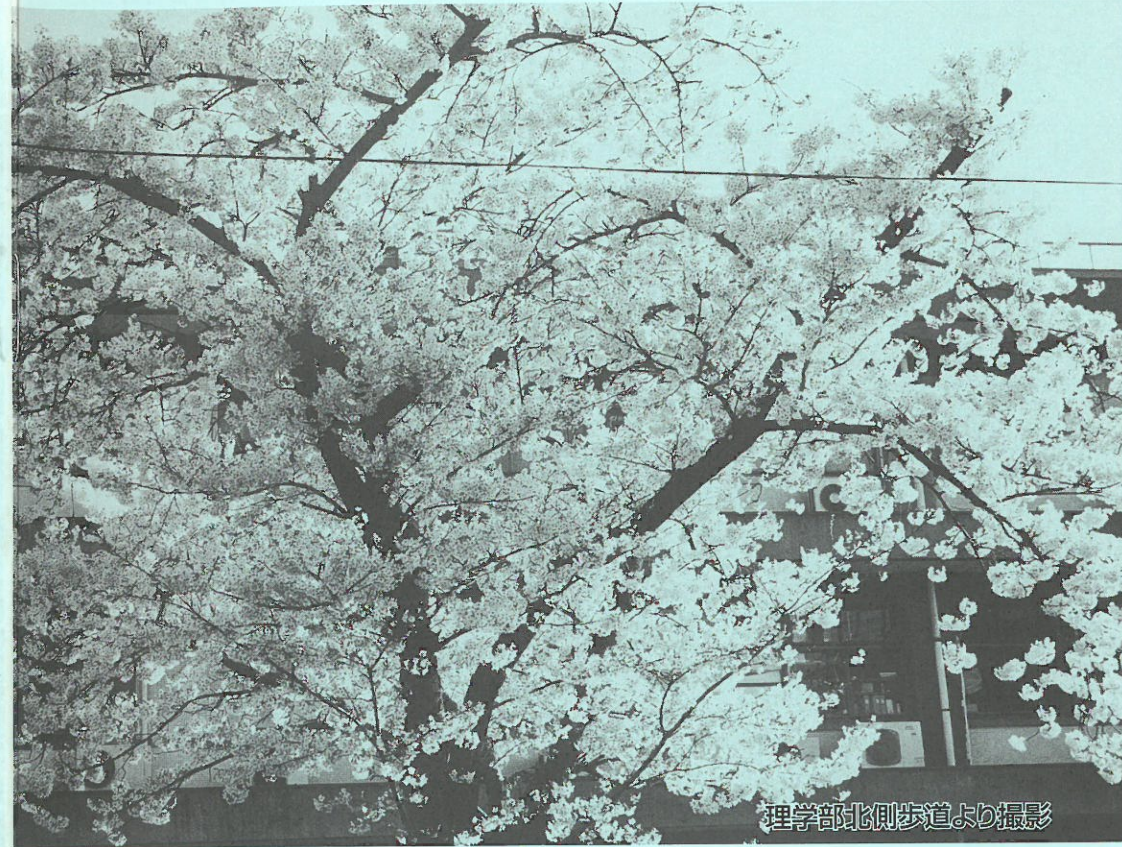


No. 6

Un roseau

アンロゾ

総合教育科目ガイドブック



理学部北側歩道より撮影

大学で得る知識

理学研究科・理学部 唐 沢 力

卒業後を考えて勉強計画を立てよう

創造都市研究科 塩 沢 由 典

「わかりやすい授業」を求めすぎてはいけない

文学研究科・文学部 石 田 佐恵子

2005年3月

編集・発行 大阪市立大学大学教育研究センター

〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138

TEL (06)6605-2131

大学で得る知識



理学研究科・理学部
唐 沢 力

今年お正月早々の新聞で、「スリランカの海岸で、象が地震のあった一時間半後に突然丘に向かって走り出し、行く道々で人々を鼻で巻き上げ、十数人を背中に乗せ後ろに引き連れて高台へ登った。その直後に海岸を巨大津波が襲い、多くの犠牲者がでた」という記

危険回避能力と知識
東南アジアの海岸を大きな津波が襲った記録は近年には無く、もちろん件の象が生まれてからの年代には全く無かったそうです。象はどのように津波の危険を察知したのでしょうか。同じ津波に対してのんびりと

事を読み、悲しい感動を覚えました。多数の犠牲者と甚大な被害を出した津波の恐ろしさも然ることながら、象の危険予知能力と、日頃から親しく接している（と感じているのであろう？）人間を共に救おうとした象の優しさにです。海で溺れかけた人間が、イルカの群れに浅瀬まで運ばれて助かったという実話も聞いたことがあります。異種の動物の間の思いやりの心は、訓練された犬と飼い主との間にだけあるのではないことも確かなようです。他種の命を救おうとする心の源は哺乳類の祖先が同じ種から発生しているところまで遡るのでしょうか。

タイトル “Un roseau (アン ロソ)”

— 一本の葦 — について

.....
B. Pascal (1623-1662)は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de
(ロム・ネ・カン・ロソ、ル・プリュ・フェーブル・ドゥ・
la nature, mais c'est un roseau pensant.
ラ・ナトゥール、メ・セタン・ロソ・パンサン)

一人は一本の葦に過ぎない。自然界で
もっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。—

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える（思考する、思想する）という行為によって、有形の現象の世界（形而下の世界）のみならず、その奥にある広い広い世界（形而上の世界）を知ることができる存在なのだ。

Un roseauとは「あなた」のことなのです。

ビデオカメラを回している観光客の映像もあり、人間の危険回避能力の無さを思い知らされました。象の力が文字などで伝えられる情報は無く、津波の知識も無かったはずで、一方人間は活きた知識を活用すれば危険を理解することは出来たでしょう。地震の後に津波が生じる危険性が漁民の間で言い伝えられていた地域があった一方で、多くの犠牲者を出した地域でその知識が全く無かったそうです。

十年以上前になりますが、中国・北京で会議があり、繁華街からタクシードで宿舎に戻る途中に大変怖い思いをしました。タクシードが当時まだ信号機もあまり無かった街中の人混みの中を、猛スピードで飛ばすのです。何度か人を撥ねた！と思うほどヒヤリとしましたが、ギリギリで皆タクシードを避けていました。同乗した先輩曰く「昔我々の祖先が持っていた危険回避能力を、まだ北京の人達は持っているのかな」。現在の北京市内の信号機が整った『都会化』への変わり様を聞くにつけ、北京市民からも次第に危険回避能力が失われていくのであらうと思います。私達は文明と引

き換えに、過去にかつて持っていた動物としての知覚・危険回避能力を失っていくのでしょうか。その引き換えに現代人が持たなければならぬ『知識』とは何なのでしょう、そしてそれをどのように得てどのように活かすのでしょうか。また、いざという時に役立つ知識はどのようなものなのでしょうか。

大学は知識を得る場、そして・・・

現在身の回りには知識の源となる情報が氾濫しています。IT化により急速に発達したインターネットからは、欲しい情報が直ぐに手に入るようにも見えます。世界中で同じ情報を共有できることはとても素晴らしいことですし、世界を変える力にもなり得るでしょう。またインターネットからの情報では、各分野の専門家からの解説・説明なども取得できます。それをコピーしてレポートすれば、関連課題のレポート成績は満点を取れるかも知れません。これは私達の学生時

代には想像も出来ませんでした。昔はレポート課題を解決するために図書館に行き、関係する書籍・文献を調べ、理解できない文言をさらに調べて自分の使える言葉で書き下さなければなりません。現在では、電子ファイル化した多量の情報を備蓄しておくことも可能でしょう。しかし、これで知識が身についたと言えるでしょうか。インターネットから得た情報でレポートを提出した学生に内容の説明を求めると、実は内容が殆ど理解出来ていなかったということも多々あります。

ところで、大学に入学された新入生の皆さん、今ここでもう一度、「自分は大学に何をしに来たのだろうか？」という問いを考えてみませんか。大学は知識を得る場です。でもインターネットでも得られる知識なら、高い授業料を払って大学へ来る意義はありません。ここで言う『知識』とは、もちろんそれぞれの専門分野の知識を中心とする理論であり、体系であり、言語であり、数式であり、思考方法であり、技術であったりします。皆さんは大学で得た知識を基にしてそ

それぞれの分野でのプロとなられるはずで、プロとしての専門知識は、それによって収入を得、糧を得る術でもあります。でも発想を変えれば、人間は糧さえ得られれば幸福でしょうか。糧を得る術を磨くのは当然としても、豊かな人生を送るには専門と違う分野の知識がとても重要になってきます。偉業を成した先達の多くはとても広い分野の知識を持っておられました。日本初のノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、漢文学の素養を専門家並みに持っておられ、また平和運動家としても世界に知られていました。同じくノーベル物理学賞受賞の朝永振一郎博士は、ドイツ語で落語を語られるのが好きだったそうです。たまたまなったプロの道はもしかしたら別の道でありえたかも知れません。自分の道を見直したりさらに深めたりするにも、その道以外の知識が必要です。プロとして必要な知識は、大学修了後にでも継続的に修得可能かも知れません。しかしそれ以外の知識を系統的かつ組織的に得られる場合は、大学以外には無いかも知れません。自らの道をじっくりと見つめ直すことにも、本當

の自分を知ることにも、自分を新たな可能性と対峙させることにも大学が最もふさわしい場なのです。若さの最大の魅力は、多様な可能性だと言われます。その可能性を試す場も大学ではないでしょうか。大学は自分の専門とする分野を思いきり究めてみる場であるとともに、他の可能性を探る絶好の機会を与えてくれる場なのです。

混迷する価値観

現代は『混迷の時代』と言われています。それはこれまでの価値観が様々な場面で見直され、変化し始めているからです。もちろん、価値観の変化は過去から現在まで途切れることなく続いてきたことではあります。現在の変化はその規模が大きく、まさに地球規模で生じていることが特徴だと言われます。例えばこれまでの価値観では「便利なことは良いことだ」とされてきましたが、便利な物を大量に人々に提供するため

の様々な文明や生産活動、営利活動が大規模化したことにより、社会に様々な変化が生まれました。百年前に比べたら生活は格段に便利になり、夢でしかなかった多くのことが実現しています。一方で大規模な生産活動により生じた公害や環境汚染では日本は『先進国』でした。多くの公害問題は未解決のままですが、特定の毒物が集中してある地域を汚染する場合には、被害がその地域に限定的に現れます。一方、石化燃料による二酸化炭素排出の問題では、その起源が家庭から交通機関、大規模工場まで世界規模で広がっていて、それが温暖化を加速していると指摘されています。温暖化の本当の原因や、それがもたらす影響については諸説があり、科学的にまだ解明されていません。既に目に見える形で現れた影響―熱帯雨林の消滅、内陸の砂漠化、氷河の消失、極地の巨大氷床の融解・離脱、海面上昇、巨大台風などの異常気象など―を考えると、どれも深刻な二次的被害や災害が心配です。さらに温暖化が進むと、海流が大きく変化して劇的な気候変動を生じ、地球は一気に急激に氷河期に移行すると

いうシナリオもあります(アート・ベル、ホイットリ・ストリーバー『ディ・アフター・トゥモロウ・The Coming Global Superstorm』メディアアフアクトリー)。一方で、地球の気候変動はその殆どが太陽活動の変化により生じ、過去の全球凍結や南極大陸の緑地化などの気候大変動もそれによってもたらされたとの説もあります(NHKスペシャル『地球大進化』NHK出版)。六千五百万年前の恐竜の突然の絶滅は、巨大隕石衝突で説明されていますが、まだ謎に満ちています。

ここ百年急速に進んできた物質文明とは何だったのでしょうか。恐竜絶滅の危機にも耐えて生き延びてきた私たちの祖先である哺乳類・猿人が、元来自然の中で受動的に食料を得て生きていたのに対して、人類が文明を手に入れて劇的に変化したのは、氷河期からの温暖化により稲作文明を得たからであるとされています。安田喜憲博士(国際日本文化研究センター)『森を守る文明・支配する文明』PHP新書)らの気候学的植生からの研究によると、それは一万五千年前に地球

温暖化による気候変動が引き金で東アジアで起こったそうです。稲作は畑に水を引いて水田とし、種子を蒔いて収穫を得るもので、定地に住んで水田を守る必要となりました。従って、森から豊かな量の水の供給が必要で、必然的に森をもらなければなりません。そして海や川にいる天然の魚を食料として資源を枯渇させないように保ちながら捕獲したのでしよう。これが『稲作漁労文明』ですが、この文明が、自然を守り自然とともに生きる『自然共生型文明』となったと考えられています。その結果「水と森を子孫のために残すことこそ種の繁栄に大切である」という価値観が生じたと言われます。

一方、西アジアでは一万三千年ほど前の寒冷化で森林が減少し乾燥化が進んだため、小麦を中心とする畑作文明が起こったとされます。乾燥した草原では牧畜がなされ、パンとミルクと肉が主な食料となつて、広い地域での牧畜と畑作が必要でした。そのため資源が枯渇すると、移動によって新たな地域に進出する必要がありました。その移動には必然的に食用動物などの

獲物を追いかけることも伴ったのでしよう。動物などの獲物を取るための道具・武器を発達させ、それを利害が対立する人々の集団間の争いに使うことは必然だったのでしょう。現在も続く人間同士の武器を用いた争いは、この辺にルーツが在ると考えられます。また、畑作のために大規模に森林地帯を開墾・開拓することにより森を消滅させることになりました。この

『畑作牧畜文明』が、『自然収奪型文明』と言われる所以です。その結果、「家族と民族を守るために自然を収奪し続けられるなら、自然をどのように変えてしまっても良い」という価値観がそこに存在したのでしよう。未開の自然を切り開くという考え方は、自然を解明し、人間にとって都合の良い形に変えてしまうという開拓者精神に繋がりが、やがて西欧合理主義として現代の自然科学にも直接繋がる思想に発展したものと考えられています。地球の気候変動期が、東アジアと西アジアでわずか二千年ほど違ったことのために、二つの文明の発祥・発展の原因を求めるとは単純化し過ぎかも知れませんが、自然への畏怖や畏敬の念は、自然

共生型文明にこそあれ、自然を支配し畑作にとって当面邪魔な森林は切り開き（消滅させ）、自然を都合よく変えたうえで、これまで自然界に無かった様々な『便利な器具・物質』を作り上げてきた自然収奪型文明Ⅱ西欧合理主義文明の中では、自然に対する畏怖の念は消滅するしかなかったのでしょうか（ビル・マッキベン『自然の終焉』河出書房新社）。

数千年前まではイベリア半島から北欧までヨーロッパ全域が鬱蒼とした森林に覆われていたことが判っています。深い森には人知の及ばない森の精が棲むような未知なる領域があり、それが人類の収奪型文明の侵入を拒んでいたはずで、長野の山中に育った私には、深い森の呼吸や、木々の囁きという感覚が懐かしく思い出されます。しかし森の殆どが人類の文明活動により消滅してしまいました。大規模な森は今のままでは西欧文明によって二〇五〇年にはほぼ完全に消滅してしまうと言われています。この森の消滅とともに、人類は自然に対する鋭敏な感受性を失う進化（退化？）を遂げるのでしょうか。地球上の生命は、環境

の激変に際して大きく進化してきたと考えられています。

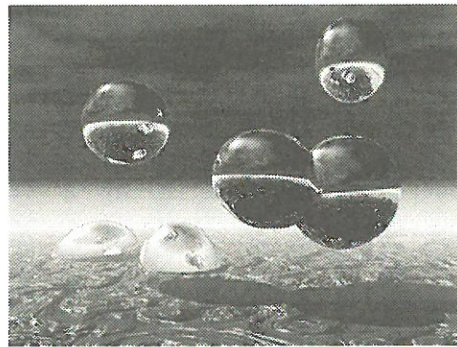
この進化を体系付けて説明したひとつの理論が『ダーウィンの進化論』です。この進化論は、「異なる個性間に競争が生じ、強い者・優秀な者が勝ち、そののみが次世代に生き残っていく」というものですが、この思想はひとつの価値観への集約として『普遍主義』とか『グローバルゼーション』という今盛んに言われている概念へと繋がっています。「競争で優秀な者が勝つのは摂理であり、そこから進歩が生まれ、その結果社会の『近代化』が成し遂げられる」とするものです。人類の英知で成し得た科学・技術の発達とそれがもたらした経済発展を高く評価し、この世界を素晴らしい方向に導いてきたこの方向こそが全人類の求めるべき唯一の正しい方向である、とする基本的な考え方が貫かれています。しかし自然科学の発達の結果もたらされた科学・技術の成果は、必ず効率の高い武器として活用されてきました。銅器から鉄器へ、爆薬へ、そして原子力へと、さらには現在最先端の文明であるコンピューターや光通信技術も最新鋭の武器に

活用されています。

現代はダーウィニズムへの批判と普遍主義に対する幻滅と限界が顕在化してきているとも言われます（今西錦司『主体性の進化論』高谷好一『多文明世界の構図』『新世界秩序を求めて』中公新書）。「普遍主義の主張を突き進むと、間違いなく地球の破滅に繋がります。環境問題を考えても、地球は今その容量を超えてエネルギーを消費し、大規模な環境破壊が生じている。経済第一の拡大再生産の方向が今後も続き、また増大すれば、環境破壊による地球の破滅は必然である」などの文明批判もその一つです。人類が地球規模の環境問題に直面している今、東アジアで発生した『自然との共生』という人類の生き方の基本が、これからの私達にとっても大きな意味を持つてくるのではないのでしょうか。

大学の使命の一つは、また大学で学ぶ皆さんに課せられた使命の一つは、過去の人類の英知を知り、失敗

に学び、現在を分析し、未来を創造していく大きなプロジェクトの中で、リーダーシップをとることではないでしょうか。そのためには専門分野のプロであると同時に、広い知識と深い洞察力、情報に対する分析力を備える必要があります。そして、さらには地球に対する気配りや、他の動物への思いやりを持てる人類となることなのではないでしょうか。



卒業後を考えて 勉強計画を立てよう



創造都市研究科
塩 沢 由 典

キャリア・プランを考えていますか

皆さんは、どんな人生設計（ライフ・プラン）をもっていますか。皆さんは、まだ若く、いろいろな可能性があります。どういう人生を送るか、大いに悩んでください。自分の将来を決めるのですから、

それだけの価値があります。

人生設計には、いろいろな要素があります。どんな恋人を見つけるか、どんな人と結婚するか。これは重要ですね。どんな仕事をするか、したいか。これも、重要な設計の一部です。そのとき、問題になるのがキャリア・プランです。

キャリア・プランは、どんな仕事について、どう能力を付けて、どんな仕事をしたかという計画です。キャリア・プランというと、ある会社に入つて、その会社での昇進を考える人が大部分ですが、現在では、生涯ひとつの会社という終身雇用制は崩れつつあります。経験をつんで能力を付けて、やりたい仕事のできる会社に転職することも珍しいことではなくなりました。

このような時代には、会社への帰属意識や忠誠心よりも、そのひとの職業能力が問われます。大学で勉強するのも、こうした能力を獲得する基礎を身に付けるためといってよいでしょう。

といっても、大学で学ぶことだけで、将来の職業

能力の基礎ができるわけではありません。職業生活について数年の経験を積むと、いろいろ不足している知識や能力に気がつきます。現実の問題に日々ぶつかって、問題意識が鋭くなり、そうした問題について考える理論や枠組み、歴史や外国の経験などを知りたくなります。現在では、そうした人たちのために社会人大学院ができていて、平日夜と土曜日などで、高度な専門知識を身につけることができるようになりました。大阪市立大学の創造都市研究科もそうした社会人大学院のひとつです。二〇〇三年四月に開設され、この三月によく第一期生を世に送りだすことができました(二〇〇四年三月にひとり修了されています)。

社会人大学院で学ぶ人は、近年、急速に増大しています。そういう大学院が増えてきているというのもひとつの理由ですが、より根本的には社会がそうした大学院での勉強を必要としているからです。

なことと無関係ではありません。

社会人大学院が求められているもうひとつの理由は、日本固有のものであります。これまで一三〇年間、日本は欧米の後追いをして経済を発展させてきました。いわゆるキャッチアップです。日本は、この過程に驚くほどの成功をみせました。しかし、一九九〇年以降、キャッチアップでは成り立たなくなりました。日本が経済的にトップに立ってしまっただけです。さらには、アジアの諸国から今度は追い上げられる時代になりました。こうなると、社会に必要とされ、求められる人間像が変わってきます。

従来は、欧米の制度や技術、動向をいち早くキャッチして紹介するひとが活躍できました。いわゆる「頭の速い秀才」です。こうしたひとたちは、飲み込みが速く、理解も早いので、キャッチアップには適しています。しかし、トップランナーの時代になって、自分たちで新しいものを創造しなければならぬ状況になると、活躍の機会が少なくなります。創造には、「頭の強い秀才」が必要だからです。

なぜ社会人大学院が求められているのか

社会人大学院が求められている理由は、大きく二つに分けられます。まず、世界共通の事情として、社会の変化が激しくなったことがあげられます。大学(学士課程)で受けた教育だけでは、一生を暮らせないという事情です。二十世紀最大といわれる経済学者にケインズがいます。ケインズは、経済政策は五十年前の学説によって運営されていると苦情を言っています。二十世紀のはじめにはそれでも済んでいたのです。しかし、IT革命をはじめ、どんな世の中が変わっていく時代には、変化についていくだけでも大変です。必要とされる知識・教養も変わってきます。それで、社会生活につきながら、もう一度、大学/大学院で学びなおそうというわけですね。

こうしたことは、社会にとつても必要なことです。IT化の中で、フィンランドやスウェーデンの経済成果が高いのは、これらの国で生涯学習が盛ん

頭の速い秀才、強い秀才

頭の速い秀才、強い秀才というのは、光通信技術で有名な西沢潤一先生の言葉です。西沢先生は、日本では秀才というと頭の速い秀才、理解が速く記憶力がよい人を考えてしまう、こういう人たちも重要だけれども、これからの日本に必要なのは、新しい時代を切り開いていく頭の強い秀才だ、ということです。

頭の強い秀才の典型は、アインシュタインです。深く考えるから、けっして速くは理解できませんでした。実際、学生時代は、そう優秀な学生とはされていません。アインシュタインの数学の先生だったミンコフスキーは、「アインシュタインの数学の得意なこととはわたしが保証する」とまで言っていない。卒業後、大学に残ったのではなくて、スイスの特許庁の役人として数年をすごしています。しかし、その間に、アインシュタインは十九世紀の物理

学の基礎を深く検討しなおして、一九〇五年に今に残る大発見をします。相対性理論、光電効果の量子的説明、ブラウン運動の三つです。奇跡の一九〇五年と言われます。今年入学された方は、今年がちょうどその百周年だということを覚えておいてください。

頭の強さが必要なのは、学者だけではありません。技術者では、青色ダイオードの中村修二さん、経営者では京セラを創業した稲盛和夫さんなども、頭の強い秀才です。稲盛さんは、決して学校秀才ではありません。旧制中学の入学試験に失敗していませんし、大学も大阪大学へ入りたかったのですが合格せず、鹿児島大学に入っています。

頭が速い秀才と強い秀才というのは、結構、分かれています。つまり、頭が速くて強い秀才はさわめて珍しいのです。数学者では、コンピュータの原理を考えたフォン・ノイマンが例外かもしれませんが。彼は、計算能力も記憶力も抜群で、さまざまなエピソードを残しています。電話帳をさっと見た

と別の大学に行っていますよね。でも、あなたは頭の強い秀才かもしれない。そういう可能性を自分でつぶそうとしていませんか。

時代の要請

だいぶ脱線してしまいました。話の筋は、キャッチアップ期に必要とされる人材とトップランナー期に必要とされる人材とは、タイプが異なるということです。

キャッチアップ期には、先例重視で、調整型の人材が求められました。なにを決めるにも、ボトムアップですんでいました。少数の頭の速い秀才と多数のすこし優秀な人材が必要でした。底上げと終身雇用・年功序列が重視されたのは、そのためです。それで社会は回っていました。トップランナー期に活躍する人材は異なります。そういう人は、まず先駆者でなければなりません。トップのリーダーシップが求められます。真の能力が問われます。頭の強い

だけで、その番号の総和を計算できたとか、ENIACというコンピュータが開発されたとき、「私の次に計算のはやいやつができた」といったとか、いろいろあります。フォン・ノイマンの仕事は、ほんとに独創的なものではなく、みなどこかに先行するアイデアがあったという人がいますが、数学基礎論・関数解析・量子力学・計算機理論・ゲームの理論と多数の領域で第一級の業績を残しており、普通の人よりも数段頭の強い秀才だったことはたしかです。

一方、記憶力の弱いことで有名な数学者もいます。フォン・ノイマンの先生のヒルベルトは、そのひとりです。彼は、自分の発見した定理（第九〇定理）という名前でも知られている基礎的な定理）を忘れてしまい、弟子に指摘されて、こんな便利な定理が有ったのか、と感嘆したといえます。

頭の強さと速さは、あまり共存しないというのは、大阪市立大学に入られた皆さんにとっては、重要なことかもしれません。みなさんは頭の速さでは超一級とはいえないでしょう。もしそうなら、きつ

秀才でなければ活躍できません。

皆さんの多くは、これから大学で学ぶのですが、こうした時代の要請に応えられる人間になってほしいとおもいます。なにをどう学ぶか、よく考えてください。

なにを学びますか

学習すべきことは、授業・講義の中にもあるとは限りません。友達との付き合いから学ぶことができます。人生の先輩から学ぶこともできます。

皆さんは、尊敬する人を何人もっていますか。それは友人であってもよいし、親戚のだれかかもしれません。学校の先生かもしれません。この大学にも、立派な仕事をされた先生がたくさんいます。そういう人から、いろいろ学んでください。

尊敬する人がいないという人は、ぜひ、そういう人を見つけてください。作ってください。尊敬できる人からでない、人はよく学ぶことはできません。

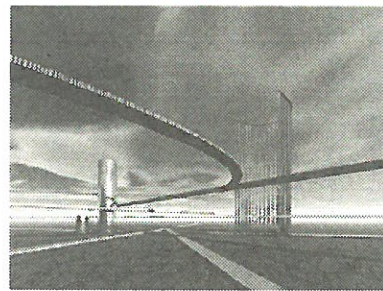
そういう人を見つけるために本を読むという手もあるのです。授業でそんな先生に出会えるかもしれません。もしひとりでもそういう人に出会えれば、その人の書いた本を芋蔓的に読むことができます。

いまの学生は、よく授業に出ています。四〇年前のわたしの学生時代には、大学は好きな授業だけに出て、単位は適当に集めていました。学生の気風はだいぶ違います。いまの学生の方が授業に対しては勤勉です。しかし、すべての授業・講義がおもしろく、わかりやすいものでなければならぬというように考えていませんか。熱中できる授業は、いつの時代にもそう多くはないのです。そういう授業を見つけるため、出会うためにいろいろの授業があると考えてください。

もうひとつ重要なことは、授業の外での勉強です。これは自分が自分に課すものですから、テーマはなんでもよいのです。そういうテーマをひとつふたつもって、自分で勉強していくことは非常に大切なことです。そのようにして「自己教育力」が身に

つきます。社会に出て一番重要なことは、この自己教育力です。

社会にでて、これだけの知識・能力で十分ということはありません。どんどん新しく身につけるべきことが出てきます。大学で学ぶのは、そうした自己教育を可能にする基礎能力を養成することです。自己教育の習慣を身につけられるのも大学教育の大きな可能性です。



「わかりやすい授業」を 求めすぎてはいけない



文学研究科・文学部
石田 佐恵子

私は大学の教師をしているが、人に何かを「教える」ことは実はあまり好きではない。「教える」よりも「教えてもらう」方がずっと好きだったりする。だから、講義をしていても、それを通して何かを「教えてもらう」ととってもハッピーな気分になる。もちろ

ん、行為としては「講義している」のは私で、学生たちが具体的に何かを指示して教えてくれるわけではないが、レポートや試験、授業への反応から、彼ら・彼女らの関心のありよう（無関心なものも含めて）を知ることができる。出身、時には国籍、学部も学年も異なる多様な学生たちのなかに、それに見あうさまざまな多様性や、時には共通する現代的経験を見いだすことができ、考えていて飽きない。社会学、特に「現代文化」を専攻する私にとっては、自分自身を含めて、学生たちの日常経験、人間関係や相互行為は格好の「生きている研究対象」であり、ひとつの社会の現場なのだ。

このように私が一方的に「教えてもらう」のは申し訳ないから、何とか学生たちにも何かを「学んで」もらい、還元したいものだと思うが、その成果をこちらから把握するのは難しい。特に総合教育科目は全学部の学生を対象にしているので、多くの学生とは半期の授業で共有した時間を過ごすだけで、その後会うことはめったにないからだ。私の担当している総合教育

科目は、同じ科目名の講義と演習を隔年で開講している。先日、三年前に演習を受講した他学部の学生が卒業の挨拶に来てくれた。三年ぶりに会ったので、初々しい新入生の印象がいきなり最上級生になっていて少し驚いてしまったが、彼が私の授業から何かを「学んだ」かどうかはともかく、異なる専門領域の学生が一回生で受けた授業を覚えていてくれたことは単純にうれしかった。大学の授業で学んだことの「結果」がいつどのような形で結実するのかわかり、教師はもとより自分の本人にもわからないのかもしれない。それは、自身の経験からもそう思うし、過去に出会った多くの学生もまたそうだったように思う。

関西の大学生を対象にした最近の意識調査によると、「望ましい大学の教師像」の第一位とは「わかりやすい授業をする」教師であるらしい（伊藤公雄「関西社会学会シンポジウム報告 Teaching Sociology—社会学教育をめぐる一」『フォーラム現代社会学』第三号、二〇〇四年）。「わかりやすい授業」とは、「説明がわかりやすい」「声や言葉が明瞭で

聞き取りやすい」「授業の要点を明確に示す」「授業計画を明示する」「成績評価方法を明示する」といったポイントになるという。多くの学生にとって、それだけ講義が「わからない」ということなのだろうか。あるいは、現代の生活はとて忙しく周囲にはさまざまな情報があふれているから、手っ取り早い結論がいつも求められているということなのだろうか。

私自身は「わかりやすい」という言葉をあまり肯定的に使わない。たいてい「そういう結論ってわかり易すぎ！」「そんなわかりやすい話って信用ならない」というように使う。もちろん、授業の技法やデザインがわかりやすいこと、つまり、発言が明瞭であること、授業計画などが明示され全体が理解しやすいことは重要なことだ。しかし、講義内容がむやみやたらにわかりやすいのは、どうなのだろう。特に、現実社会を扱う社会科学の講義は、理科系・人文社会学系の学生のどちらを対象にするにせよ、多少抽象的で難しいところ、ただちには了解できないところがある方がむしろ良いのではないか。ますます複雑化する現代社会に

ついて考えるには、どのような問いに対しても唯一の「正解」などありえないし、むしろ「正解」を疑うような思考こそが求められている、と考えるからだ。具体的な経験談をあげてみよう。

最初に書いたように、私は人に何かを「教えてもらう」のが好きなので、いろんな機会を見つけては「学生として」講義や講座に顔を出すことにしている。聴く側の場所に座ると、一五分くらいで集中力がとぎれるとか、退屈な話はすぐ眠くなるとか、話す側に居続けると忘れてしまっているようなことが思い出されることが多い。海外に滞在しているときは絶好の機会なので、講義を担当する友人たち、教授・講師陣の許可を得て、ときどき講義をのぞかせてもらっている。

二〇〇一年夏、私は短期の在外研究でアメリカ合衆国ボストンに滞在していた。周知のように、その年の九月十一日、ハイジャックされた飛行機による同時多発テロ事件が起こった。同時多発テロというとNYのWTCのイメージがあまりにも強烈だが、ハイジャックされた四機のうち二機がボストン発だったこともあ

って、ボストンは、「まだ身近にへ犯人」が潜んでいるのではないか」という、ある種特別な恐慌状態になった。街のすがたは何一つ変わっていないのに、「この世界は何もかも変わってしまった」という会話があちこちで交わされ、テレビはぶっ続けて「悲惨な現場」の映像を流し続け、信じがたい現実具体的なイメージをつけ加え続けた。そのような状況のなかで、「なぜこのような出来事が起こったのか」という「問い」に対して、単純化された「答え」が性急に求められていく。

それに対して、もつとも早く手軽に「わかりやすい答え」を提供してくれるのは、テレビというメディアである。当時のテレビを録画したテープを見てみると、既に十一日の午後から「オサマ・ビンラディン」や「アルカイダ」という名前が登場し、根拠が明示されぬままへ犯人」と同一視されていて驚く。恐慌状態にあるとき、人は「安心したい」「いつも通りの生活に戻りたい」がために、一刻も早く「正解」とされる答えを強く求める傾向がある、ということを目の当た

りにさせられた。翌日には、画面の片隅にアメリカ国旗がいつも表示されるようになり、「パールハーバー以来」「初めての本土への攻撃」「戦争」という言葉が至る所で使われていた。誰が「犯人」で誰が報復すべき（敵）なのかも明確でないまま、全米各地で、またボストンにあるいくつかの大学でも、アラブ系アメリカ人、イスラム教徒、留学生などへのいわれのない暴力事件が報告された。

社会全体がこのような特殊な状態にあるとき、大学はいったいどのような知を提供できるのだろうか。同時多発テロの起こったわずか二週間後、大学で新学期が始まった。夏休み中の在外研究だったので、私の滞在はあと残りわずかだったが、関心のある講義科目をいくつか選んで、まずは第一回目の時間出席することにした。これに続く三週間あまりの期間に「学生として」出席したさまざまな授業やセミナーは、実にいろいろな意味で興味深く学ぶところが多かった。

授業を担当する教授たちは、ほとんどの場合、今回の出来事についてのコメントから講義を始めた。それ

らのコメントは、とにかく何かを言いたいのだが、何をどのようにコメントして良いかわからない、そんな「わかりにくさ」に満ちていた。

開講初日の月曜日。文化理論を担当する年若いカナダ人講師は、前日にNYに行き、タイムズ・スクエアが異様な光景になっているのを見てきたという。至る所に国旗が掲げられアメリカを讃える歌が歌われているのを目撃しショックを受けた、という話から始めた。そして、「テレビが『戦争』という表現を強調するのは、愛国心をかきたてるような言説に過ぎないんだけどね」とつぶやいた。翌日出席した社会学概論の授業では、教授はドラマチックに「価値観の相対性」について話したが、事件についてのコメントはあまりわかりやすくなかった。「アメリカに神の加護を！」と訴えることには正統性がない」とぐるぐるともわりながら話をしたが、何が言いたいのか抽象的で学生にはあまり伝わらなかつたと思う。教師としての自分を振りかえると、私もまた、このような状況でわかりやすい話はできそうにない。あれもあり、これもある、

と考え、話しながらぐるぐる回ってしまうのかもしれない。

大学の講義は言うまでもなく「生（なま）」であり、話し手も聞き手も触れられるほどすぐそこにいる。インターネット講義やブログ、チャットによる情報伝達と共有が盛んに話題になる時代において、「ライブ」である講義の良さは、実はこのような「わかりにくさ」にあるのかもしれない。講義内容や主張がたとえわかりにくくとも、教師もまた私たちと同時代に生きる同じ人間であり、苦悩しながら考え、考えを伝えるためにまた思考する、その「生の」過程を聞き手は目撃し、時には共有することができるからだ。そこにはわかりやすい「正解」はないかもしれないが、言いよびみや沈黙、同じフレーズの繰り返しなどから、容易には解けない「問い」に直面したときの人間の弱さ、誠実さ、知恵や賢さを見いだすことができるのかもしれない。

この週からはまた、毎週木曜日の昼休みに大学が主催する特別連続セミナーが開かれることになった。事

件直後から大学HPのトップページに「この事件へ対処するために」といった項目が特設されたが、この連続セミナーの情報もそこに加わった。これらは、学生のみならず一般市民の参加も自由だったので、さまざまな年齢・階層・関心を持つ人びとが多数参加するセミナーとなり、学期途中からは学生が単位取得できる講義科目として設定された。毎回特定のテーマを定めて異なる専門領域の教授三、四人がそれぞれ五〜一〇分程度話した後、質疑応答の時間がとられる。六〇分の昼休み時間に開かれたセミナーはいつも超満員で、途絶えることなく質疑が続き、時間通りに終わることがなかった。政治学、法学、コミュニケーション研究、ジャーナリズム、心理学、哲学、軍事学などの各分野の教授たちが、それぞれの専門を基に短いコメントをする内容も興味深いものだったが、私がより多くを学んだのは、聴衆たちの関心のありようであり、その質疑応答の内容だった。講義やセミナーという知の形式から私たちが学べることは、教師や学生という役割を離れた「生の」相互行為のなかにこそある。テ

●●●●● 筆者略歴 ●●●●●

唐 沢 力 (からさわ つとむ)

1945年生まれ
1975年東北大学大学院理学研究科博士課程単位修得退学
現在、理学研究科・理学部教授
専攻分野／物理学 半導体・光物性物理学
担当講義／光物性論 物性物理学 入門物理学

塩 沢 由 典 (しおざわ よしのり)

1943年生まれ
1968年京都大学大学院理学研究科修士課程修了
現在、創造都市研究科教授
専攻分野／理論経済学
担当講義／ベンチャー経済論 複雑系経済学 進化経済学研究

石 田 佐 恵 子 (いした さえこ)

1962年生まれ
1988年 筑波大学大学院博士課程社会科学研究科中途退学
1998年 博士(社会学)筑波大学取得
現在、文学研究科・文学部助教授
専攻分野／文化社会学 現代文化研究
担当講義／現代文化の社会学 現代文化の社会学演習

編集後記

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。
「アン・ロン」も第6号になりました。この号にも3人の先生方にご寄稿いただきましたが、これまでもまして現代的なテーマが取り上げられています。
21世紀を迎えた世界が地球温暖化や戦争の危機にさらされ、文明のありようを問い直すべき時期に来ていること、社会の急速な変化にともない、求められる知識・能力が変化してきていること、そのような時代の中で問題を深く持続的に考えるべきこと、そのどれもがこれから大阪市立大学で学ぼうとする皆さんには欠かせない問題意識と言えるでしょう。地球市民として生きていくためにどのような教養が必要なのか、総合教育科目をどのように履修していけばよいのか、小誌がそのガイドとなれば幸いです。

大学教育研究センター ホームページ
<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

レビがともすれば画一化された「わかりやすい答え」のみを提供しがちなのに対して、大学における知の可能性がもしあるとするなら、異なった水準の「問い」と「答え」を提示すること、オルタナティブなメディアとなりうる可能性にあるのだと思う。

同時多発テロほど劇的なかたちではないにせよ、私たち誰もが先の見えない不安の蔓延する現代社会のなかに否心なく巻き込まれて生きている。理科系・文系の学生を問わず、現代社会に生きる一員として考えなければならぬ「問い」は数多く存在する。容易には説明のつかない出来事・事件が頻発する一方、それに対する性急な「正解」やともすれば断定調の「わかりやすい説明」がさまざまメディアを通じて示され、ちまたにあふれている。だが、何かを「わかってしまう」ことは、その「問い」に対して「結論を出してしまふ」ことであり、それを「考えるのをやめてしまふ」ことにもつながっていくことを忘れてはならない。

だから、大学でこれから学んでいこうとする新入生に望みたいことは、「わかりやすい授業」を求めすぎではないけない、ということだ。総合教育科目は、特に専門外の学生たちにとっては「手っ取り早く単位が取れ」「面白くてためになる」講義の方が歓迎されるのかもしれない。わかりやすく面白い講義の価値を否定しようと言うのではないが、わかりにくく理解できない授業にも、何かしら学ぶところはあろう。大学の授業で提示される「問い」の多くは容易には解くことのできない水準のものであり、講義が終わり単位を取得した後も長い時間をかけて考えていくに値するものだ。講義のなかに「わかりにくさ」、容易には理解できない違和感を持つことがあるとしたら、それを記憶の片隅にでも留めて置いてもらえたら、と思う。それはもしかしたら、大学卒業後の長い人生のなかで、ずっと後になって芽生える「問い」、その後考え続けていくことになる「問い」との出会いとなるかもしれないから。